



Do you like

some more

ENGLISH?



## 英語はどこで生まれ、どう育った？②

日本の歴史の中での最大の事件はなんでしょう？と聞かれたら、それぞれ思い浮かべることが違うかもしれません。



オレ的には、明治維新かな・・・



私は「関ヶ原の戦い」1600年！

イギリスの歴史で最大の事件と言えは、1066年のノーマン・コンクエスト、つまり、ノルマンディー公ウィリアムによる征服です。イギリス人で1066年は何が起こった？と聞かれて知らない人がいないぐらい、有名な事件ですが、英語という言葉にとっても大事件となりました。

ちょっと前回のお話を復習しておくとして、まず、イングランドという島にケルト人がやってきて、その後ローマの支配になり、アングロ・サクソン人が国づくりをして、そこへ、ヴァイキングのデーン人がやってきた・・・という大まかな流れでした。そのデーン人の王様クヌートの死後、息子ハーディクヌーズが王位を継いだものの2年で急死、再びアングロ・サクソン系のエドワード(懺悔王)が王位に就きました。しかし、実子がいなかった彼の死で、後継者争いが勃発しました。

後継者選びはもめにもめて、結局、当時、有力貴族だったエドワードの妻の兄、ハロルド・ゴドウィンソンが即位し、それに反発したのが、ノルマンディー公ウィリアムです。



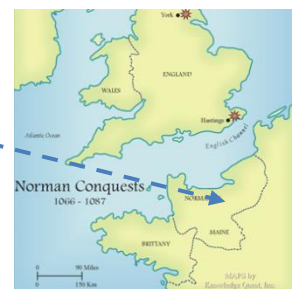
誰？ノルマンディーってどこ？



ノルマンディーって…確か、フランスの北の方？

そうです、現在は、ノルマンディー地方と呼ばれるフランスの北の地域で、当時は公国でした。

ノルマンディー公国



で、そのウィリアムさんは死んだ王様とはどんな関係？



王様のお母さんのエマが、このウィリアムの大叔母さんでした。言い換えればウィリアムは、王様のいとこの息子。



なんか…その関係はちょっと遠くない？でも、ハロルドさんも王様の奥さんのお兄ちゃんだから、血縁はないし・・・、どっちもどっちか。

ともかく、じゃんけんで決めるというわけにはいかないのだから、ハロルド対ウィリアムの戦争になり、ウィリアムが勝って、1066年12月にイングランド王として即位します。さて、彼は一人でやってきたわけではなく、多くの貴族、その従者や兵士、聖職者を引き連れてやってきました。

英語にとっても大事件は、ウィリアムの即位から約 300 年、公用語がフランス語となったことです。フランス語と言っても、彼らが使っていた言語はノルマン地方の方言です。この時代におよそ 1 万語のノルマンフレンチの語彙が移入し、英語と同化していったといわれています。後に、戦争や婚姻で大陸の領土が増えるとともに、パリを中心とした中央のフランス語も多量に流入していきます。

しかし、ここで特徴的なのは、フランス語はあくまでも上層階級やその階級と関係の深い職業の人の言葉で、田舎の小さな地主や農民、職人などの労働者は、従来の英語を話していました。というわけで、イングランドは、英語とフランス語という二重言語の国ということになりました。

 じゃあ、隣の人と言葉が通じないってこともあるの？

基本的には上層階級の人が直接農民と話をする機会がなかったと思われそうですが、商人のように両方と接する人は今でいうバイリンガルだったと想像されます。また、ノルマンディー貴族がイングランド女性と結婚し、生まれた子供は公的な場ではフランス語教育を、私的な場では英語でコミュニケーションを、というバイリンガルになったことで、英語という言語が消えることなく生き残ったということになります。

二重言語ならでは、ということで面白いのが、動物と食肉の言葉です。狩りをしたり、家畜として動物を育てるのは“下層階級”、そのお肉を食卓でいただくのが“上層階級”と想像してください。生きていた動物は英語系、食卓にあがるとフランス語系の語彙となります。

| 生きてる動物(古英語由来)   |   | 食事用の肉(フランス語由来) |           |
|---|---|----------------|-----------|
|  deer      | 鹿 | venison        | 鹿など野生動物の肉 |
|  ox        | 牛 | beef           | 牛肉        |
|  sheep     | 羊 | mutton         | 羊肉        |
|  pig/swine | 豚 | pork           | 豚肉        |



さて、英仏間で勃発した百年戦争、黒死病（ペスト）の流行、などの諸事情で、約 300 年のフランス語時代から英語が復活する日がやってきました。1362 年、議会の開会式が英語で行われ、法廷の審理も裁判も英語を使う訴訟法が成立したのです。これで、立法と司法、つまり公的な言語として英語が復活しました。

こうやってイングランドの母国語として英語が復活したわけですが、実は 14 世紀は、さまざまな方言のパッチワークだったようです。近所に住んでいても、違う地方出身者同士では、お互いの言うことが分かりにくいということがあったに違いありません。

14 世紀の終わりごろになって、「英詩の父」と呼ばれる詩人ジョージ・チョーサーが活躍し、その後、印刷技術の向上、印刷本の普及で、イースト・ミッドランド地方の方言が、今日の英語の基礎をなすようになったのです。

こうやって見ると、英語という言葉は歴史の中で長い冒険の旅をしているようですね。そして、今でもその旅は続いています。次は「いろいろな英語」のお話です。

To be continued...

